

## おやじの会を“母親”の視点で紐解く

清水 憲志

(中国短期大学 保育学科)

キーワード：おやじの会、父親、母親、子育て支援、家族

本稿はおやじの会に関わる“母親”にインタビューを行い、おやじの会に関わる母親の視点からおやじの会について明らかにしたものである。結果、「参加の理由～価値観の合う仲間との出会い～」「活動の継続～楽しいことをしたい～」「家族との関係～それぞれの成長～」、「人とのつながり～安心感と面白さ～」の4つのカテゴリーに分類することができた。おやじの会とは、「おやじ」という男性が主たる会であることを連想させながらも、一定数女性である母親が関わっている実情が分かった。そして、母親から父親におやじの会の参加を促すケースがあることも報告された。その中で、母親はおやじの会の活動を通して、夫である父親の一個人としての成長等も願っていることが示唆された。これらのこと等、父親に調査するだけでは見えにくかった、母親視点のおやじの会の一端が明らかになった。そして、更なるおやじの会の可能性について言及した。

### 1. 問題と目的

昨今、前代未聞のコロナウイルスの影響等により様々な問題が起きている。子育てにおいても同様で、経済的不安が進み、収入が減少している。そして、賃金の少なさ等から晩婚化、少子化がさらに拍車がかかり、子どもを産み育てることの難しさが顕著に表出している。2019年の合計特殊出生率は1.36であり、ますます減少の一途を辿っている。その子育て環境を改善するため、地方公共団体やNPO等が“子育て支援”活動を行っている。しかし、合計特殊出生率を改善するほどの支援には、至っていない。

男性の育児参加に関して、育児休暇に関する施策を推進することで、社会的には促しているものの微増程度に留まっている。もう一人の親である父親が子育てに参加することは当たり前ではあるが、労働時間が長いことや育児休暇を習得することが難しいこと等から、全ての父親が子育てに十分に関わることができていない。しかし、父親が積極的に子育てに関わることで母親の育児不安を解消したり、子どもの社会性を高めたりする等の効果があることは尾形(2011)、清水(2011)等の研究で明らかにされている。その中で、父親の子育て支援が注目されており、子どもが就学した時に関わる機会がある“おやじの会”への期待は高い。清水(2011)の研究で幼稚園におけるおやじの会の所属の有無で、育児時間や子どもの社会的スキルに有意な差が見られ、おやじの会に所属している方が高いことが明らかになった。また社会問題として、地域との交流を父親が持ちにくい状況で、定年を迎え仕事を終えた時に孤立することがあるが、おやじの会は学区だけでなく、地域を拠点に活動している団体もあり、おやじの会は様々な観点から有効な支援と考えられる。

おやじの会の歴史は古く1982年に結成された団体が最古であり、2003年からは全国おやじサミットが開催され、昨年度はコロナウイルスの影響で対面での開催はされなかったもののリモートで19回目が開催された。2022年度は埼玉で全国おやじサミットが開催される予定である。おやじの会が子どもに対するプレパーク活動をしたり、学校の入学式や修了式の映像を学校と協力し配信する技術を提供したりする等、自分達が企画推進する以外にも学校内外で様々な役割を果たしている。しかし、それぞれの活動の実態は正確には掴みきれていない。但し、全国おやじサミットを通じて会同士で共有したり、つながりは増えたりし、ある種の世襲制度のように、技術の継承は行われている。

## おやじの会を“母親”の視点で紐解く

しかし、“おやじ”という言葉から女性から近寄りたいたいということを参加していない人々から言われることがある。また、シングルマザー等周りに父親がいない子どもへの配慮を促されることもある。その反面、普段関わりがないが故に父親ではないが、父親的存在として関わられることを喜んでいられる子どもがいることはおやじの会の活動に参加することで見られる姿である。

そして、“おやじ”の会でありながら、夫のサポートとして女性が参加することや夫が地域及び学校での活動に伴う集まり等が苦手なため、母親でありながらも主体的に参加する例が増えている。前述の先行研究にもあるように“おやじの会”は“父親”を“中心”とした団体であるため、研究の対象となるのは“父親”であり、これまでの研究で“おやじの会の母親”に焦点を当てたものは全くない。上田（2007）や須田（2014）等がおやじの会の事例研究を行っている中で、参加者として母親が含まれている可能性はあるが論文の中では読み取れず、薄葉（2006）が定義したように、おやじの会とは、「子育て、子供との触れあい、教育、健全育成、地域貢献、自主学習、そして男どうしのお付き合い等を目的として、男性のみが集まって活動する、学区もしくは地域単位の集団である。」ことがそれぞれ論文の中での認識であるため、可能性は低いと言える。

そこで、本研究では、おやじの会に参加する母親に焦点を当て、おやじの会に関わる“母親”の視点から関わった理由や関わったことで得たこと等を明らかにする。そうすることにより、父親の視点でしか語られなかった“おやじの会”について、子育てを共に行う母親の視点で解明し、これまで語られることのなかった観点から“おやじの会”の多様の可能性を紐解きたい。

## 2. 方法

「全国おやじサミット」の関係者及び筆者が10年ほど前から関わりのあるおやじの会の関係者等を通じて、インタビューの協力を依頼し、ZOOMで行った。なお、対象者は各々のおやじ会にそれぞれ5年以上は関わっている。

対象者：おやじの会に関係する母親6名

（※：父親が主に活動する母親4名、主に活動するのが母親2名）

分析方法：ナラティブの主題分析

倫理的配慮：事前に所属校内の倫理委員会で倫理審査を受審し、承認された。インタビューの承諾を得る際に内容について説明し、許可を得た後に行った。

## 3. 結果

### （1）カテゴリー・コードの作成

調査により得られたデータについて、MAXQDA2022を用いてコーディング作業を行った。それぞれのインタビューについて分析し抽出をした結果、「参加の理由～価値観の合う仲間との出会い～」「活動の継続～楽しいことをしたい～」「家族との関係～それぞれの成長～」、「人とのつながり～安心感と面白さ～」の4つのカテゴリーに分類することができた。それぞれのカテゴリーの事例を紹介しながら、結果を述べる。また、カテゴリーを形成するサブカテゴリーも示す。

なお、コードとそれぞれの事例数は表1の通りである。

表 1 おやじの会に女性が関わる意義に関するコード

カテゴリー	サブカテゴリー	総事例数
参加の理由～価値観の合う仲間との出会い～	子どもと一緒にしたい	17
	自由な活動	
活動の継続～楽しいことをしたい～	子どものため、	16
	自分のため（飲み会）	
家族との関係～それぞれの成長～	家族での役割分担・助け合い	20
	共通の話題	
人とのつながり～安心感と面白さ～	出会えるつながり	50
	普通では出会えないつながり（地域・全国）	

## (2) 参加の理由～価値観の合う仲間との出会い～

まず、おやじの会に自身が参加したこと若しくは夫が参加したことで夫を介して関わったことで、価値観の合う仲間との出会いが見られた。その中には以下のような事例が見られた。

### （事例 1）

強制的に連れて行った。嫌がってたし最初。「え！いやや」って言われて。でもとにかく行こうって。最初一人で行ってなってたけど、「私も行くから」って一緒に行って。だがら、元年に行ったの女のひと私だけやったな。

この事例は、PTA の役員を母親がやっていた中でおやじの会の結成の話が上がった際に、他の保護者から打診されて、夫に伝えたそうである。夫はさほどこういった保護者会の活動には意欲的ではないために、強引に連れていき、母親自身も夫のお手伝いをしながら、時に積極的に関わったケースである。つまり、どちらもある種おやじの会に関わっていたケースである。今回のインタビュー協力者の 6 名のうち、4 名はこのようなケースである。それぞれに父親が主体的に関わりながら、大きなイベント、例えば逃走中や学園祭での出し物の準備や当日スタッフとして参加していた。母親自身も父親には負けず劣らず積極的に楽しみ関わっていたのが印象的である。母親は母親として交流を深め、家族単位での交流へと波及していた。子どもの年齢は様々で多様な関わりを生むきっかけとなっていた。

### （事例 2）

元々私もそういう活動とか好きですし、子どもも行ってますし、どんな内容のかというのを、お父さんたちがどんなことしてるのかなというのも興味もありましたんで、できれば参加したいと思って参加しました。

### （事例 3）

PTA でできることの限界が分かったから、おやじの会のできる事がまたすごいと思えたんだと思うんですね。最初からおやじの会だけだったら、ちょっと違ったかも。

(事例 4)

主人はPTAは全くできない、時間的にできない人。

(事例 5)

おやじの会があるっていうのは〇〇さんが手紙か何かで入学の時に出していただいて、「こんなんがあるけどこんなん行く？」みたいな感じのことを聞いて、「ふーん」だったんですけど。まあまあ、子どもたちもいろいろ経験できると思うしってふうに、のりくらししながら、そのまま申し込ませてもらったんですけど。

事例 2～5 のケースは母親がおやじの会の会員として積極的に関わったケースである。そもそも、父親が時間的理由等で参加することが難しかったり、過去にPTAに参加していた経験から、PTAよりもスピード感をもって様々な活動ができる事を求めたりして、母親自身が積極的に関わっていた様子が垣間見える。それぞれにすぐにおやじの会に関りを持ったわけではなく、PTA等の色々な活動をする中で、それぞれの壁に直面しそれを解消するために、おやじの会を求めたようだ。

これらの事例からでも見えるようにおやじの会という言葉からは“父親”の会というイメージもつが、これは“母親”つまりは“女性”を排除しているという意味ではない。全国にたくさんの会があるので、全てに当てはまるとは現時点で言えないが女性が参加することをむしろ好み“親路の会”と表記する所もある。話を聞く中で感じられたのは、性別ではなく、“同じ価値観の合う仲間”であるか否かだということが分かった。

これまでのPTA等の学校・地域活動に参加した経験から、それまでの活動では制約を感じることもあり、“自由に活動”を行いながら、“子どもと一緒にしたい”ということがきっかけで母親自身も自由なおやじの会に参加していることが分かる。

### (3) 活動の継続～楽しいことをしたい～

活動に対して、まれに参加するのではなく、会の一員として継続することについて、以下のような事例があった。

(事例 6)

子どもたちのためっていうのがあればもう絶対っていうか、ほとんど断らない。

このように、“子どものため”という理由があれば、やらない理由はないという強い思いを話されていた。父親が参加する理由としても挙げられることがあるが、やはり子どもに“楽しい”ことを経験させたい。特に、生きたリアルな経験を望む声が多い。母親達の中にも父親同様の思いを持っていることが分かる。その気持ちがあるが故に、一時的な経験で終わらずに継続して活動することにつながるのだろう。

(事例 7)

楽しかったこと。子どもたちがわいわいやってるのを見てるのも楽しかったし、夜の打ち上げでみんなでわいわい飲んで、子どもたちのこうだったああだったっていうのを話し合うのも楽しかったし。

(事例 8)

夢を語った後の飲み会って盛り上がる。

参加者である子どもやその家族に楽しんでもらうのはもちろんであるが、自分達も負けず劣らず楽しんでいく様子が垣間見える。そして、おやじの会にはつきものである、飲みニケーションも積極的に楽しんでいく様子が伺える。その理由としては、事例 8 でも述べられている、“夢”を語った後という状況下に大人たちは言葉通り酔いしれていると言えるだろう。その“夢”を語るのに性別は一切関係なく、共通の“夢”や価値観が重要な要素と言えるだろう。

(事例 9)

熱量がある集まりじゃないと、やっぱりおやじの会としての所属は私は難しいような気がしてま

す。

この事例からも“価値観”の重要性を感じ取ることができる。やはり、色々な年齢かつ性別がある中で、共通の価値観がないと継続して何年も活動することはできない。

全国おやじサミットを一例にとっても読み取れるように 2022 年で 20 回大会を迎える。半ば同窓会のようになっており、何年、何十年の付き合いがそこにはある。大人になって同じ活動をするのに同じ“夢”、“価値観”、そして“熱い思い”がないと数十年も継続させることは難しい。その原動力となるのが“子どものため”に“楽しいことをしたい”という熱き思いである。そして、熱く燃やし続けるためには“自分自身も楽しむ”という思いが、おやじの会を継続させることにつながっているだろう。

#### (4) 家族との関係～それぞれの成長～

おやじの会に入るきっかけや継続する中で子どもが成長してほしいということは父親も語られていたが、母親も同様の思いを持っていることが読み取れる。

(事例 10)

みんな家で学校の事とかしゃべるから。でも、普段しゃべらん子はおやじの会のあれに参加するって言ったり楽しそうにしてるってのは言ったりしてました。

おやじの会の行事に家族で参加することで、共通の話題ができ、それについて家庭で話すようになる。この事例では、友人を介して聞いた話であるが、家族による交流が増えたことで、そういったことも親の耳にまで届くようになった。普段喋らない子が喋るようになるきっかけを作ったとなるとおやじの会の存在は大きく、それに影響されて、子どもも成長していると考えられる。

(事例 11)

「どうぞ行ってきてください」っていうふうに言ってたほうなので。いろんなお父さんたちと触れ合うことによっていろんな……、職種も違ってますので、いい経験ができるじゃないかなと思って私は送り出してたほうです。

(事例 12)

私は逆に主人にいろんな人と出会って、お父さんの広がりをもっと深めてほしいと思って、

## おやじの会を“母親”の視点で紐解く

これらは飲み会について尋ねた質問の回答である。社会に出ると仕事で関わりのある方との交流はできるが、それに関わっていないと限られた職種の人々としか関わることでできない。おやじの会を通して、特に父親達が好きな飲み会という場所においては、本音で語ることができる場である。清水（2013）でも示唆されたようにおやじの飲み会は“同僚”ではなく“仲間”と行うことに意義がある。その場に参加することで、父親として、一人の社会人として成長することを願っていることが窺える。

### （事例 13）

結局、普段から関わってないからそうなるんよね、お父ちゃんがね。

これも飲み会について尋ねた質問ではあるが、こちらの方は飲み会の参加について肯定していたので、おやじの会に入っていない母親が父親を参加させようと思った際に、おやじの会に行くことを懸念していることについて、どう思うかを尋ねた回答である。ここからも読み取れるように、おやじの会に参加している父親は家族の中で関わり方に差はあるものの、家族の一員として一定の役割を果たしていることは読み取れる。また、清水（2022）でおやじの会に父親が参加していた子どもにインタビューした結果の中にも父親に対して否定的な言葉をかける子どもはいなかった。逆に、肯定的な言葉をかけており、「お父さんは楽しそう」だったと口々に答えていた。そして、自分達も親になった際にはおやじの会に参加したいと語っていたことも含めて考えると、おやじの会に参加している父親たちは“飲む”ためだけに参加している人は基本的にはいない。子どもや家族を楽しませようとしていることが主たる目的である。それが、普段の家族関係の中でも構築されていることが分かる。

### （事例 14）

迎え来てって言ったら迎え来てくれるんです。みんなお父さんたちが、私が電話するでしょ。電話して、終わった迎え来て、どこどこって。それだけ。

これは、母親がおやじの会に主体的に参加している方の言葉である。父親は参加していないが、会の活動に関しては一定の理解を示し、母親がしていることに自分ができる限りの協力をしていることが読み取れる。

おやじの会には、直接的に参加はしていないが、父親が主体的に参加しているケースの反対でサポートを行っている。先ほどの母親が示した飲み会についての理解と同様に、父親も理解を示している。これは、ただ母親も“飲み”に行くのではなく、先ほど述べたような様々な活動を終えた後に振り返りや次回の活動に向けての話をしていることが分かっているからである。また、家で過ごす時には、社会的性差ではなく、“家族の中での役割”を十分に話し合い、それぞれの役割を十分に果たしていると考えられる。また、“共通の話題”があることでコミュニケーションも増えるため、より潤滑な家族関係になると考えられる。

これらのことから分かるように、家族の関係が円滑にいつているからこそ、次のステップともいえる身近な家族との交流を生み出す、おやじの会に家族として、様々な形で参加できるのだろう。但し、おやじの会の活動を通して、様々な人達の意見を聞いたことで、円滑になることももちろん考えられる。

### (5) 人とのつながり～安心感と面白さ～

おやじの会に入ることによって人とのつながりを生み出すのは明白である。そこに集まる人々について次のような事例がある。

#### (事例 15)

おやじに入ろうと思う人はやっぱりそういう垣根が低いというか、人に気遣って気遣ってみたいな人はおやじの会とか家族ぐるみでとかって入ってきいひんのちゃうかな？面白そうとかって思う人ってそういう人らなんちゃう？

#### (事例 16)

気もあまり遣ってなかったな。楽やった。楽しかったし。

先ほど“夢”や“価値観”について見出されたが、この事例からも見えるように家族ぐるみで関わるにはそれが“面白い”と思っていないと難しいだろう。おやじの会は仲間を作る場所であることも過去の研究からは明らかであるが、ある種家族のような安心感とも言える、気の使わない関係性が大事ではないだろうか。様々な年齢、職種の方がいるがそこで気を使っているのは、仕事場の同僚とさほど違いはないのではないだろうか。おやじの会が醸し出し、気の遣わない関係性が魅力となるのだろう。

#### (事例 17)

気持ちがある人が、さっと、やろうと言ったらその翌日にはできちゃうとかいうフレキシブルさがすごく。

戦術にあるが、PTA の限界から、動きやすいおやじの会と発言した方もいた。PTA よりも制約がないため、スムーズに活動に移れるのだろうが、そもそも会に関わる人々が多種多様であるが故に柔軟な発想の元、動いていると言えるだろう。その結果、縛られない“楽しさ”を感じ取ることもできるのではないだろうか。

#### (事例 18)

お母さんたちと話に行くと、必ず子どもの話になるんですよ。だから、何とかちゃんママとかいう感じになるんだけど、おやじの会は違って、自分のこととか、自分が好きなこととか。仕事の話もされないし、あんまり。とにかく夢を語る場だったんですよ、こうしたいとかああしたいとか。それがすごく大きかったです。

女性でありながら、自分の価値観との違いから女性達と一緒にいることを望まなかったケースにおいても、認められる安心感があったと感ずることができる。

同じ“夢”や“価値観”をもつ人とのつながりが大人にとっても心地よい場所になっており、その大人たちの姿を見る子ども達にとっても望ましい場になっているのは言うまでもないことである。それは、同僚ではなく何にも囚われない“仲間”という関係性が重要な要素となっているだろう。

次の事例は人とのつながりに含んではいるが、当時は専業主婦だったために聞かれた話である。

(事例 19)

何て言うのかな、お母さんもそういう時間があってもいいんじゃないかなとかって思うんで、子育てってやっぱりお母さんと、小っちゃい時はマンツウになりがちのどこってあるじゃないですか。私もよく主人に、1時間だけでもお母さんの時間を、お母さんじゃなくて女性としての時間を作ったら、それだけでもリフレッシュになるし、ちょっとしたことで女の人の気持ちって変わるんですよ。しんどい時にお菓子を買ってきてもらったりとかしたら、それだけですごく今までの「うー」となってたのがぱっと晴れたりとか。だから、小学校だったり、中学校だったり、子供たちがどんどん手を離れていったら自分たちの時間も持てて、いろんな所とか、友達と旅行とかだったり行けると思うんですけど、そのしんどい時、子供と一緒にいる時間が長い時にそういった時間を作ってもらえたりとか、女友達だったり、ママ友だったりとかという、そういう時間を作れることによって、活力にもつながりますし、飲み会じゃなくてもちょっとそこら辺で、喫茶店でコーヒー飲んだりとか、そんなことでも全然違うので、リフレッシュできるんで、そういう時間を与えてもらってたんだなと私は思うんです。

現在は主婦と主夫の言葉があるので、女性ならではのということではないが、男性だけではなく、女性としてもリフレッシュする場が必要ということは、女性の育児不安に関わる研究で様々に言われている。それが、おやじの会に夫が主として関わる中で、妻という立場ではあるが関わりをするようになり、ママ友作りのきっかけにもなったようである。

おやじの会の行事には父親と参加する子どもが多い。つまりは、母親にとってその時間は息抜きができる。子どもにとっても父親を主として関わる時間は貴重なため、子どもと父親にとってそれぞれに成長するために必要な時間であるが、それと共に母親にとっては、今後の生活をよりよく過ごすために心の洗濯をする時間となっている。この二つの効果があることは家族という共同体の中で常用であると考えられる。そして、おやじの会は一回限りのイベントではない。年に複数回のイベントを行い、それが複数年にわたって開催されている。そのため、子どもと父親は楽しい時間、母親にとっては息抜きの時間と見通しをもって過ごせるようになる。そして、子どもの成長に伴い、関りに変化が生まれると母親も途中から参加し、家で家事をしたり、のんびりしたりするというリフレッシュの在り方から、子どもの遊ぶ姿や異年齢の友達及び大人との関わり等、親と子どもという狭い家庭での関係性では気が付きにくいことも見えるようになり、それが見えることを楽しむ形に変容していくと考えられる。

(事例 20)

その4校からなので、つながりで今ずっとつながってるっていう感じなので。その違う小学校の時に、4校で運動会とかしてたので。集まって。その時に会った子どもたちと、中学校に行っただけの子ね、みたいな感じっていうのはあったと思います。

(事例 21)

地元じゃないところでの関わりみたいなのができてよかったなと思ってますけど。

この事例は地域及び全国のサミットを通じて、普通に生活をしている中でも出会うことがなかったものである。学校単位での活動では、子どもと違うクラスでも部活動等で会う可能性はあった。しかし、全国や地域単位のおやじの会であれば、生活の行動圏も違い、“きっかけ”がなければ出会うことはなかった。しかし、おやじの会という拠点を通じて、つながりが生まれ、それが継続していると



いうことは人生において大きなことである。出会いが全て良いとは限らないが、何らかの影響を与えることは言えるだろう。

#### 4. 総合考察

##### (1) 母親にとってのおやじの会とは

これまでの分析から、母親にとってもおやじの会の存在は意義深いものである。以下にコードの関係図を示す。

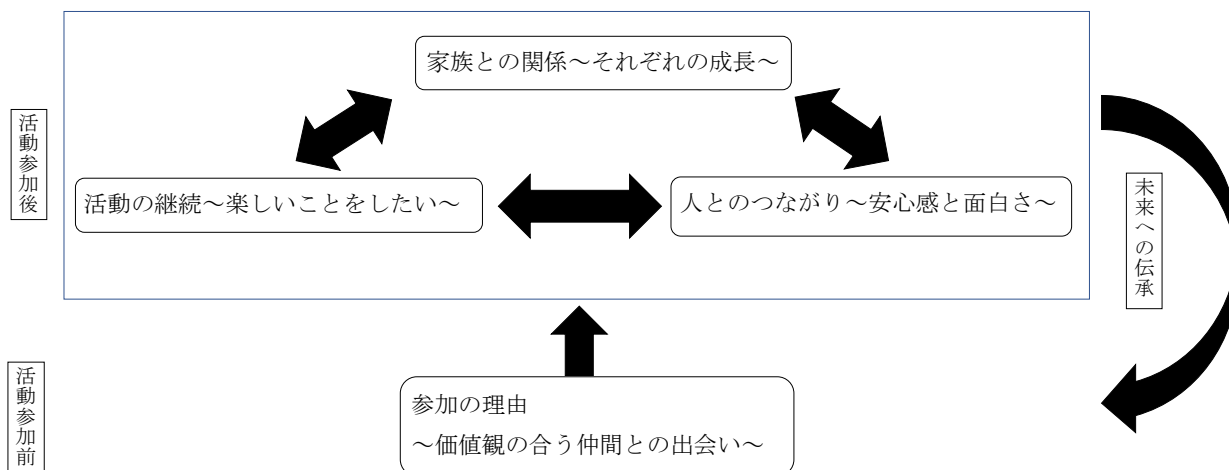


図 1 母親がおやじの会に関わる意義に関する関係図

父親同様に母親もおやじの会に参加することが一つの契機となる。そこから、つながりや継続、家族の関係ということが関連していることは、これまでの結果から明白である。そして、その活動をしていることが、未来のおやじの会に関わる人へ大きな影響を与えていると考えられる。おやじの会の活動を行うことで、どの様な行事を行っているのかを知り、体験する。また、知り合いの口コミで活動内容等について情報を得ることができる。つまり、自分達が所属していることで、自分達に有意義なことは言うまでもないが、連鎖的に周りにも影響を与え、それが“おやじの会”の将来を担う人々を育てることに間接的につながっている。

ここで重要なのは、主として関わっているわけではない、母親からの話からも伺い知ることができたことである。やはり、おやじの会は父親が中心となりながらも、“母親も関わってもよい”、という価値観が選択の幅を広げることになり、多様な可能性を生み出す。その可能性が未来への伝承へとつながる。そこには、現在の子育てを主に母親が行っているという事実があり、学校と言う場所を介して、おやじの会の情報を発信する場合、母親から得ることが多く、母親ネットワークに頼らざるを得ない側面もあるからだろう。そうであれば、父親と限定するのではなく、母親にも協力を求め、家族一丸となって取り組むことの方が生産的である。しかし、母親に頼り切るだけでは、本来の意図から反するため、父親が“主となる”ということは重要な要因である。その場を提供することが、未来のおやじの会の参加者につながり、役割や楽しさ、関係などを伝承することになるだろう。

##### (2) 家族の在り方の検討

おやじの会を“母親”の視点で紐解いた結果、4つのコードを抽出することができた。これまでの研究では、おやじの会は父親にとって有意義な子育て支援になることや子どもの社会性をより育てること等が明らかになっていた。そして、母親に直接インタビューをした結果、母親にとっても有意義

な効果があることが明らかになった。おやじの会は子どもと父親を結び付けるだけでなく、母親にリラクスの時間を与えたり、母親自身が積極的あるいは補助的に関わる中で家族としての共通の時間を設けたりした結果、家族としてよりよい生活を過ごせることが分かった。巽（2018）が「家族とともに過ごす時間の中で妻子と経験や体験を共有することによって、お互いに良好な関係を築くことができ、父親が家庭領域に居場所を得る様子がかがえる。子育てへの積極性の違いに関わらず、どの父親も家庭領域に居場所を得られていることから、例え短くても家族と一緒に時間をつくることによって、居場所を得ているということができようだろう。」と述べていることから、おやじの会のイベントは、普段の生活の中で短い時間ではあるかもしれないが、家族の共有の時間を設けるためには有意義であり、そして、よりよい関係になるのだろう。インタビューに協力いただいた家族というのはそもそも良好な関係を築いているように感じた。それは、日頃から家族として、それぞれの役割を果たしながら、関わりを行っていることが前提としてあると考えられる。しかし、その“役割”も様々であり、父親が料理を積極的に行い、送迎や行事にも積極的だったケースや家では子どもと関わるが、行事等には消極的で地域活動にも参加していなかったケース等様々である。しかし、家族単位での交流が進むことで、より家族の中での“役割”が多様になったり、消極的だったことを積極的にむしろ主体性をもって行うようになっていたり等の変容は見られる。

これまでのおやじの会に参加していない方に話を聞くと“飲み会”について否定的な話を聞いていた。しかし、今回のインタビューを通して、むしろ積極的に促す姿が見られた。これは、父親として、一人の大人として多くの人と関わる事で成長を願っていることが窺えた。さらに、成長だけに留まらず、地域に友達を作り、今生きる時間をより有意義に、そしてその先も友人関係を継続させ、心穏やかに過ごせることを期待していることが分かった。つまり、父親達は現在の子どものことに楽しいことを経験してもらい、そこから成長することを主たる目的としているが、母親はその父親を応援したり、手伝ったりする理由は父親達の“成長”及び更なる“いきがい”をもって過ごしてほしいという目的があることが分かった。普段の家族関係ということがおやじの会の活動に関わる上で重要ではあるが、関わる事で様々な家族の在り方を見たり、同年代の子を持ち、家族として過ごしている人たちの悩みを聞いたりする中で、家族という在り方の検討をおこなっているのではないだろうか。夫婦というのは、現在の家族の在り方上基本的には、自分の親よりも長い時を過ごすことになる。しかし、それぞれに家庭により、価値観のずれがあり、それを互いに修正しながら、折り合いをつけて生活していく必要がある集団である。自分が過ごしてきた家族が正しいかどうか判断することは難しい。家族として時を重ね、様々な家族の在り方を色々な視点から感じることは、より豊かな家族の在り方をみいだせるのではないだろうか。そのために、多様な家族と直接的に関わり、色々な価値観を見いだせるおやじの会は家族の在り方を考える上でも重要であり、子どもにも多種多様な家族の在り方を提示することにつながるだろう。

### (3) おやじの会を通して子育てを考える

子育てを行う中でアタッチメント（愛着形成）というものがある。数井（2021）が「子どもにとって父母は同等に重要なアタッチメント対象者であることが示された。このことについて研究者らは、一九九五年までは母親が専業で子育てにあっていた家庭が多かったので母親の方がより影響度が高かったのではないかと推測している。そして、その後、共働き等が増加したことで、父母ともに出産直後より積極的に育児にかかわるようになったことを反映し、二〇一六年の結果では、父母の影響が同程度になったと議論している。」と述べるように社会が変化する中で、これまで通説として言われてきたものが修正されてきている。過去の習慣や文化にとらわれず、今を生きる人たちは新しい形を検討する方が有益である。男性・女性という性別ではなく、誰がどのように関わるのが重要である。お

やじの会は多種多様な形で、それぞれの地域に即して活動を行っているが、全国おやじサミットでの交流を通して、ほとんどのおやじの会に共通している理念がある。それは、“できる人ができる時にできることを” というものがある。これは、多様性が求められる社会の中で、家族においても言えることではないだろうか。女性だから家事・育児をする。男性だから主たる家計を担う。ではなく、その家族の在り方として、それぞれがよりよく生活を行い、長い時間共に過ごすために“できる人ができる時にできることを” の考えのもとで家族として役割を決め、共に生活を過ごせばいいのではないかと考える。

おやじの会に母親が関わるのと同様に子育ての形も家族の中で、それぞれの長所を生かし、短所を補いながら過ごせばよいのではないか。さらに、おやじの会という居場所も借りて自分だけではできないことを同じ“価値観”をもつ、仲間に手伝ってもらいながら家族のために関わっていくことが、未来に生きる子どもの成長を見越しても重要な事だろう。

また、地域での活動する意義についても、吉川（2018）「地域の中で多くの経験を重ねていき、その過程で、地域を感じる、というより地域を感じざるを得ない状況にもなるということである。地域に守られ、地域の中で多くの経験をし、そのたびに地域を感じ、意識しながら、地域を好きになっていく、愛着を育てていくということではない。子どもが地域で育つ過程は、地域のモノを人と介して活動する中で、地域を感じ、地域への愛着を育てるということではないだろうか。」が述べるように、学区つまりは地域に根差した団体が活動を行うことで、地域全体の子育て力の向上にもつながり、この土壌があり続ける限り連鎖は次の世代の子育てを行うための基礎にもなる。子育てを「孤育て」と称し、悲観的な言葉で過ごすこともあるが、「個育て」。つまりは、子どもを育てることを中心に、親として、人として、地域に住む人材として、それぞれが一個人として育ち、その育った集団として“家族”という単位でさらに成長することが社会全体の子育て力の向上につながると考えられる。

今回の調査を通して、おやじの会の多様な可能性の一つが垣間見えた。引き続き全国のおやじの会に関りながら、おやじの会の可能性について検討していきたい。そのため、おやじの会の研究ではあるが、父親だけを対象とするのではなく、様々な立場に関わる人々を対象として調査を進めていきたい。そうすることで、おやじの会が持つ意図に沿いながらも、新たな機能・効果の発見、父親に限らないおやじの会の意義について明らかになるだろう。

## 5. 引用文献

- 数井みゆき (2021) 養育者としての男性—父親の役割とは何か— ミネルヴァ書房 pp69-97
- 尾形和男 (2011) 父親の心理学 北大路書房 pp94-108
- 清水憲志 (2011) 幼稚園における「おやじの会」の機能に関する研究 兵庫教育大学修士論文 43-53
- 清水憲志 (2013) 学校のおやじの会における飲み会が持つ意味 日本保育学会第66回大会
- 清水憲志 (2022) おやじの会が子育て支援として子どもに与える可能性 日本乳幼児教育学会第32回大会
- 須田康之・宮元博章・堀端優也・小林禎明・長谷拓郎・大島秀子・青平 (2014) おやじの会という連携のかたち—兵庫教育大学三校園『おやじの会』の事例をもとに— 兵庫教育大学研究紀要 45 1-8
- 巽真理子 (2018) イクメンじゃない「父親の子育て」 晃陽書房 pp77-113
- 上田圭恵 (2007) 学校と家庭の連携のあり方に関する一考察—H県H市のおやじの会の事例を中心に— 教育学研究紀要 53 181-186
- 薄葉豊 (2006) おやじたちは今—おやじの会に見る男縁の再構築— 東北人類学論壇 5 52-69
- 吉川はる奈 (2018) 持続可能な社会をつくる日本の保育 かもがわ出版 pp46-55

## 付記

本研究は JSPS 科研費 JP21K20252 の助成を受けたものである。